

崎田賞受賞に寄せてー 内視鏡診療への情熱と継承ー

HOME	学会概要	専門医制度	スクリーニング 認定医制度	学術集会・セミナー	機関誌
------	------	-------	------------------	-----------	-----



写真1：授賞式の様子

私には、人生の礎となる二人の偉大な恩師があります（写真2）。

まず、国立がんセンター時代にご指導いただいた吉田茂昭先生です。吉田先生が大切にされていた言葉に、「One for All, All for One」があります。その精神を体現される姿勢を、私たちは「吉田イズム」と呼んでいました。吉田先生は、私たち研修医にも真剣に向き合っていた姿勢から献身とは何か、指導者とはどうあるべきか、医師として、そして人として、いかに生きるべきかを学ばせていただきました。

吉田先生からご紹介いただいたのが、二人目の恩師である工藤進英先生です。秋田で工藤先生のもとで学んだ日々は、私の医師人生における大きな転機となりました。工藤先生から教えていただいたのは内視鏡技術ではありません。プロフェッショナルとしての「先を読む力」、そして「決してブレない信念」でした。工藤先生は非常に厳しく、叱責を受けるときには本当に怖い存在でした。しかし一方で、一生懸命挑戦した末の失敗に対しては、決して人を責めることなく、むしろ温かい言葉でねぎらい支えてくださる先生でした。その懐の深さ、優しさ、そして何より人間愛というものを、私は工藤先生から学ばせていただきました。

私の内視鏡診療への情熱、診療姿勢、さらには仲間や後輩との向き合い方の根底には、間違いなくお二人の恩師から受け継いだ揺るぎない精神があります。



1990年、工藤進英先生との秋田赤十字病院時代

左から工藤進英先生、吉田茂昭先生、著者、藤盛孝博先生。私の恩師の先生たち。

写真2

今でも私の礎となっているのは、がんセンター時代から共に歩んできた優秀な後輩たちの存在です。当時は、今なら「厳しすぎる指導」と言われるほど、厳しく接していたと思います。しかし時を経て今、その関係は深い信頼と絆へと変わり、現在も私を支えています。彼らは今、日本を代表する内視鏡医、教育者、研究者として第一線で活躍しています。更に、当時指導した海外の先生方も世界各地で活躍され、現在も交流が続いております。こうした後輩たちの存在こそ、私にとって何よりの誇りであり、宝物です。

また、私の運命を大きく変えた出来事として、イギリスにおける「大腸IIc病変」の発見があります（写真3）。1995年、国立がんセンター総長であられた阿部薫先生から、「日本の風土病と言われている大腸IIcを海外で発見し、それが世界共通の病変であることを証明せよ」という使命を受け、私は英国へ渡りました。英語は決して得意ではありませんでした。しかし、「内視鏡への情熱だけは誰にも負けない」という思いで、ひたすら検査に集中しました。その結果、208例の大腸内視鏡検査の中でIIc病変を2例発見することができ、それがLancet掲載へとつながり、大腸IIcは“日本特有の病変”ではなく、“世界共通の病変”として認知されるようになりました。私はこの経験を通じて、「真剣に、情熱を持って取り組み続ける姿勢こそが、幸運や奇跡を引き寄せる」ということを、身をもって学びました。



1995年、英国リーズ大学病院での大腸内視鏡検査

写真3

また2000年、国立がんセンター時代にJapan Polyp Study（JPS）研究班の初代班長を務めました。立ち上げたJPSは、現在、日本の大腸癌検診の礎となる大規模臨床試験として、世界的にも高く評価されています。内視鏡診断において、これまで白色光観察のみでは見逃されていた平坦・陥凹型病変に対し、NBIやインジゴカルミン撒布を用い、「見逃さない内視鏡診断」をさらに早期癌に対しては、拡大内視鏡を用いたNBI診断、pit pattern診断などを駆使し、正確な深達度診断を追求してまいりました。大腸内視鏡診断学の進歩は、日本から世界へ発信された誇るべき文化であり、その発展に少しでも関われたことを幸せに思っております。

こうした経験を経て、私が今、最も大切に思っていることがあります。それは、次世代を担う若い先生方へ、「内視鏡検査の楽しさ」と「診断学の奥深さ」を伝えていくことです。そのために私は、「大腸スキルアップアカデミー」や「関東IIc研究会」を毎年開催しております（写真4）。これらの会は、私一人の力ではなく、恩師の先生方や、多くの第一線で活躍する内視鏡医の先生方や病理の先生方からのご協力によって支えられています。年々参加者も増え、若手医師の先生方と直接意見交換を行い、その疑問や感想に触れられることは、私自身にとっても大きな刺激となり、学びにもなっています。



2017年 エキスパートの病理の先生ならびに優秀な後輩の先生方に賛同いただき、若手内視鏡医の育成のために立ち上げた大腸内視鏡スキルアップアカデミー

写真4

内視鏡検査とは単なる技術ではなく、そこには情熱があり、哲学があり、そして“Art”があります。

若い先生方にはこれらの会を通じて「ぜひ世界に挑戦してほしい。失敗を恐れず、自分の信じる道を突き進んでほしい。そして何より、心から内視鏡を楽しんでほしい。」

そう願っております。

私は今でも、内視鏡を握っている時間が大好きです。そして、仲間たちと大腸癌について語り合う時間が、何より楽しい時間です。特に、陥凹型病変（IIc）を発見した瞬間の喜びと興奮は、今もまったく変わらません。これすらも私は、生涯現役のつもりで、内視鏡と向き合っています。本賞を励みに、微力ながら今後も日本の内視鏡医学の発展、そして次世代育成に尽力していきたいと思っています。

最後になりますが、これまで支えてくださったすべての先生方、仲間、後輩、スタッフ、そして患者さん方に、心より感謝申し上げます。

<藤井隆広 先生 略歴>

1983年	金沢医科大学医学部卒業 金沢医科大学第II病理学教室 助手
1986年	国立がんセンター（現中央病院）内視鏡部 研修医
1987年	国立がんセンター（現中央病院）内視鏡部 レジデント
1990年	秋田赤十字病院内科 医員
1992年	国立がんセンター東病院内視鏡部消化器科 医員
（1995年5月～9月）	英国Leeds General Infirmaryにて内視鏡の指導
1998年	国立がんセンター中央病院内視鏡部消化器科 医員
2001年	国立がんセンター中央病院内視鏡部消化器科 下部消化器内視鏡医長
2003年	藤井隆広クリニック開院
2025年	藤井隆広クリニック理事長

<日本消化器内視鏡学会 会員歴>

1985年5月29日	入会
2003年5月30日	本部評議員（2024年5月30日まで）

<内視鏡医学に対する功績>

- 大腸内視鏡診断・治療の分野において長年にわたり顕著な貢献を重ね、その研究成果および教育活動は国内外で高く評価されている。国立がんセンター内視鏡部（現・国立がん研究センター）における豊富な臨床経験と研究業績は、日本の大腸内視鏡医学を国際的水準へと発展させる原動力の一つとなった。
- 昭和医科大学横浜市北部病院の工藤進英教授と共に取り組まれた大腸表面型腫瘍、特に陥凹型病変に関する形態学的特性および悪性度の体系化は、大腸腫瘍学の概念を大きく転換させた業績である。nonpolypoid colorectal neoplasm（NP-CRN）の概念を世界に提示した点は歴史的意義を有し、その後の早期大腸癌診断学の発展に大きな影響を与えた。
- 色素内視鏡、拡大内視鏡、NBI等のImage-enhanced Endoscopyを用いた質的診断および深達度診断の体系化により、早期大腸癌診断の精度向上と診療の標準化が進み、本邦の内視鏡診療の質的向上に大きく寄与してきた。
- 厚生労働省科学研究費補助金（がん臨床研究）によるJapan Polyp Studyにおいては、初代研究代表者として研究を主導し、内視鏡的大腸ポリープ切除後の適正な検査間隔を提示するとともに、内視鏡的ポリープ切除による大腸癌発生抑制効果を明確に示した。これにより、内視鏡診療の予防医学的価値が科学的に裏付けられ、本研究成果は我が国の大腸癌対策の重要な基盤となり、現在に至るまで国際的にも高い評価を受けている。
- 早期大腸癌における転移・再発リスクの層別化および治療適応決定に関する研究、大腸EMRの安全性向上に資する技術的改良など、診断から治療に至る広範な領域において継続的に卓越した業績を挙げている。